

佳作

『なぜ生きる』を読んで

通信ネットワーク工学科2年 長尾 健太

私がこの本を読んだきっかけは、幼少期から小中学校をともに過ごし、ともに学問を学んできた同級生である友人の死である。彼女はいつも前向きであった。彼女はいつも強い信念を持ち、目標に向かい日々精進する人であった。そんな彼女は一年と半年の間の闘病生活の後、この世を旅立った。彼女は闘病生活中も弱音を一回も吐かなかったという。「この治療を乗り越えれば……」といつも夢を語っていたという。そんな彼女を私はこれからもただただ見習い、敬い、冥福を祈るだけである。

この本に「つらい思いをして病魔と闘うのは、幸福になるため」という章がある。しかし、どんなに辛い治療をして病魔と闘っても死にゆく者は大勢いる。その中で「どうせ死ぬなら」といって治療を放棄する人がいる。逆に「この正念場を乗り越えれば夢は実現できる」という信念を持ち、治療をする人も大勢いる。この違いは何か。すべての人間が、苦しくとも生きねばならぬ理由とは何か。現日本において、これは論証されることもなく、誰も知ろうとしないというのがこの本に書かれている事実である。

この本にある記述がある。「死は、突然やって来る」と。確かにそうである。試験を受ける日、仕事を休む日などの日程を立てることは可能である。しかし、死に対しては日程を指定できない。自分がいつ死ぬのかわからなければ、家族・友人・知人の誰であってもいつ死ぬのかさえ予測できるはずがない。「光陰矢のごとし」のように、猛スピードで日常は過ぎ去り、年をとり、死を迎える。しかしすべての人間が同様の年で死を迎えることができるものではない。

私の友人のように、二十歳を迎える前に死ぬ者もいる。もっと若くして死ぬ人も中にはいるかもしれない。

人間をはじめとする生物には命がある。命には電池と同じように「寿命」というものがある。人間の命の寿命と、電池の寿命では異なる点がある。まず、電池は「五年使用推奨」など、ある程度の目安がわかる。しかし、命の寿命は死ぬ時が来るまで分からないものである。次に、電池は機械を動かすために使っているが、命は自分を生かすために使っている。そして、電池は「交換」すれば再び機械は動き出すが、命はそもそも交換できない。命が止まれば、どんなに生きたくても二度と起き上がることはできない。生き返れない。これより、命は各個人に与えられた「たった一つ」のものであるということが想像できる(すずらんの会編『電池が切れるまで』角川書店、参考)。

最後にこの本を通して、私なりの生きる理由とは、死ぬときに「この世で生まれてよかった」と思うためだと考える。これは自分のためであり、亡くなった友人のためでもある。今後自分もいつ死ぬのかわからない状況である。しかし、死ぬときに不満を残したままでは死にたくない。後悔はあっても「この世で生きることができてよかった」と思って死に

たい。また、若くして亡くなった友人の分まで多くの経験をして、いろいろな道を歩みたいというのが私の勝手な願望である。

『なぜ生きる』 明橋大二・伊藤健太郎 1万年堂出版

佳作

『くちびるに歌を』を読んで

情報工学科2年 矢野 友加里

今から四年前の夏休み、中学一年生の時、私は吹奏楽部に入部し第一音楽室で暑いな練習をしていた。吹奏楽部の練習場所は第一音楽室だけでなく、他の教室も使用する。私は、三階にある少人数教室を使用していた。教室に移動している時、第二音楽室から合唱部の歌声が聞こえてきた。毎日のように聞いていたこの曲のおかげで、この本に出会い心が温かくなった。

この本は、一人の視点だけでなく、複数の視点から書かれているので、読みにくいとを感じる反面、その人の感情などを詳しく読み取ることができる。また、この本が出版されたのは二十一年十一月だ。なぜ三年前の合唱曲を舞台とした本を、今になって出版したのか。それは、著者が私たち読者に何かを伝えたいと思っているからだと思う。著者の思いをそのまま伝えることは難しいが、自分なりに考えて著者の思いが分かった気がする。

これは、長崎県の五島列島にある中学校の合唱部が舞台で、コンクールまでの練習の苦悩や部員同士の葛藤などを通して、一人一人の成長を書いた物語だ。例えば、一人での事を好み、自閉症の兄の面倒を見るが、友達には無意識に兄の存在を隠してしまう少年、サトルの成長。友達の前で素の自分を出せず、周りの事を気にしてしまう少女コトミが、サトルと関わることでどう自分を変えられるかなど、登場人物のそれぞれの成長を書いている。そして、大きく関わってくるのが私が合唱部の歌声で聞いていた曲「手紙～拝啓十五の君へ～」だ。この「手紙」をテーマに進められていく。私は今書いたサトルとコトミに注目して本を読み、考えてみた。

サトルは、小学校の時から友達と遊ぶ事もなく学校生活を過ごした。それは、自閉症をもつ兄がいるからだ。放課後には兄が働く事務所に迎えに行くため、中学校に入学しても部活に入らず、一人の学校生活を送ってきた。だが、先生の勘違いで入部届を渡され、断ることができず合唱部に入部することになった。しかし、この出来事がサトルを大きく変えることになる。大切な仲間ができ自分のしたい事を見つけることができた。コトミはサトルに自分の素の姿を知られた事を周りの人に言いふらされることを恐れていた。しかし、サトルにはそんな気持ちがなく、自分が困っている時にさりげなく手を貸してくれるサトルに少しずつ心を開き始めた。そして、コトミは兄やサトルの過去を知り、コトミもまた秘密にすることを誓った。

自分を変える事は簡単ではなく、素の自分を知られることは少し怖いと思う。しかしこの話を読んで、一人では無理でも完全に変える事は無理でも、仲間となら努力することはできるのかな、と思った。小さな出来事や友達や先生などの一つの言動が、自分に勇気を与えてくれるのだと思う。自分を大切に思ってくれている人には、同じ気持ちで向き合いたい。そんな気持ちをあらためて強く感じさせられた。

そして、この本の中で合唱部の宿題となっていたものが十五年後の自分に向けての手紙だ。私なら何を書くのだろう。きっと十五年後は仕事をして、自分の力で生活しているだろう。だけど自分は一人ではなく支えてくれる、見てくれる人がいる事を忘れないで、辛い事があれば仲間を思い出してほしい、そう書くだろうとこの本を読んで思った。これからの自分にきっと大切な言葉になると思う。昔から私は、一人でため込む事が多かった。そのたびに自分に負担がかかり後悔する結果になってしまった。きっと学生の今よ

りもこれからはそういう状況になりやすいと思う。すべてを人に頼るのも問題だが、迷った時は仲間や先輩に相談する事を忘れないでほしい。

「あなたが苦しんでいるなら大好きな音楽を聞いてください。大好きな歌を歌ってください。あなたの思いを仲間はその唇で伝えてください。私が中学校一年の暑い夏に聞いた合唱部の歌声とあの曲があなたに伝わっていることを願っています。」この本に出会って、仲間を大切に思うのはもちろん、中学校の部活仲間会いたくなった。その時、未来の自分に書いた手紙のように、照れくさくて今まで伝えられなかった思いを伝えたいと思った。

『くちびるに歌を』 中田永一 小学館

教員によるエッセイ

タンペレ工科大学（フィンランド） の図書館事情

サンタクロース、ムーミン、サウナ、Nokia、Linuxなどが連想され、さらに「森と湖」という代名詞をもつ北欧フィンランド。昨年度の1年間、在外研究制度を利用してフィンランド・タンペレ市にあるタンペレ工科大学のホルピネン教授の研究室を訪問し、勉強させていただきました。フィンランドは、南端にある首都ヘルシンキでさえも北緯60°の位置にあり、稚内市（北海道）が北緯45°にあることを考えると、かなり北にある極寒をイメージする地です。私が滞在していたタンペレ市は、ヘルシンキよりもさらに電車で2時間北上した内陸に位置します（内陸なのに、なぜかカモメがたくさんいます）。

赴任した4月には、未だ湖に分厚い氷が張られており、高松の真冬よりも寒い気候でした。5月には色々な色の花が咲くようになり、7月には清々しい夏の本番を迎えます。しかし、夏らしい夏は7月のみで、8月になると長袖が必要になる日もあります。9月には白樺の葉が黄葉し始めて、急に日没が早くなります。（実は、赴任後から8月頃まで、日照時間は16時間以上あり、起きている時間帯はずっと明るかったです。特に、6月末の夏至付近ではほぼ1日中明るいのです。）11月になると氷点下の日もあり、12月には雪が積もるようになりました。周りからは「今年は暖冬だ」と言われていましたが、1月に入ると一面が銀世界となり、マイナス20℃以下の日々が続きます。日照時間も短く、午後3時には

電気情報工学科
太良尾 浩生



暗くなります。冬の北欧は極寒のイメージですが、室内はどこでも暖房が利いているため、快適です。

さて、タンペレにはムーミン博物館があり、夏の旅行シーズンには日本人観光客を見かけます。また、日本と関連した企業や日本食レストランもありますので、決して多くありませんが日本人の方も暮らしています。タンペレ市内の大学へ短期留学している学生さんもいました。タンペレ工科大学は、工学系の5学部で20以上の学科があります。学部毎に大きな建物（学部棟）があり、そこから枝状に学科棟が広がっています。学部棟同士も渡り廊下で繋がっており、外に出なくても学内を移動することができます。

ところで、本題である大学の図書館なのですが、スペースがなくなってしまいましたので次号ということで・・・

